

## 2004年シンクロ日本代表ジュニアチームの戦いぶりとは課題

～第9回FINAジュニアシンクロ世界選手権に帯同して～

本間三和子

### 1. はじめに

2004年7月21～25日、モスクワで開催された第9回FINA（国際水泳連盟）ジュニアシンクロナイズドスイミング世界選手権（以下、「ジュニア世界選手権」と略す）に、日本代表ジュニアチームの帯同審判員として参加したので報告する。

ジュニア世界選手権は、シンクロのジュニア年齢区分（15歳～18歳）で世界覇者を決める大規模な競技会である。毎回、30カ国以上がエントリーしてくる。このジュニア世界選手権で頭角を現したソリストのほとんどが、シニアの世界選手権でも活躍しており、まさに、シニアへの登竜門として位置づけられる競技会である。

ジュニア世界選手権は、1989年に第1回大会が開催され、これまでの大会結果は表1のとおりである。2年おきに開催されており、今回が第9回にあたる。日本は第6回大会（コロンビア，1999年）を除いて全ての大会に参加してきた。コロンビアでの第6回大会は、外務省より治安悪化による渡航危険情報が出され、財団法人日本水泳連盟の上部組織の判断でチーム派遣を見送った。この大会には日本だけでなく、アメリカ、カナダもチームの派遣を中止した。1991年にイタリア、サレルノで開かれた第2回大会では、日本は3冠（ソロ<sup>#1</sup>、デュエット<sup>#2</sup>、チーム<sup>#3</sup>）の3種目優勝を達成し、日本のジュニア層の強さをアピールした。

私はこれまで、第5回大会（モスクワ，1997

年）に日本代表チームの監督として参加、第7回大会（シアトル，2001年）に審判員として帯同した。また、第8回大会（モントリオール，2002年）ではFINAのレフリーとしてニュートラルな立場で競技運営の指揮を執った。今回の第9回大会は再び日本代表チームの帯同審判員という形で参加し、日本チームとともに戦った。

### 2. ジュニア世界選手権の特徴

ジュニア世界選手権の競技種目（イベント）は、ソロ、デュエット、チーム、フリールーティンコンビネーション<sup>#4</sup>（以下FRCという）の4つである。FRCは2002年の第8回大会から加わり、今回で2回目の新競技である。ソロ、デュエット、チームはフリールーティン<sup>#5</sup>とフィギュア<sup>#6</sup>の2つの競技プログラムを行い、50%ずつに換算し、その合計点で順位を決定する。FRCはフリールーティンのみを実施し、その点数で順位を決定する。

現在、FINAのシニアの大会はすべてテクニカルルーティン<sup>#7</sup>とフリールーティンの2つのプログラムを実施し、両方の総合得点で順位決定を行う。唯一、このジュニア世界選手権だけが、フィギュアとフリールーティンの2つのプログラムを実施し、それぞれ50%ずつで換算した得点の合計で順位決定する（FRCは例外）。テクニカルルーティンとフリールーティンの組み合わせの場合、ソロを除いて個々の力を評価する種目がなく、またテクニカルルーティンとフリールーティンの順位がそれほど大きく変化することがない。一

表1 第1回～第9回FINAジュニアシンクロナイズドスイミング世界選手権競技結果(第3位まで)

開催年	開催市(国)	ソロ	デュエット	チーム	フリールーティン コンビネーション
第1回 1989	カリ(コロンビア)	金 アメリカ 銀 カナダ 銅 日本(奥野史子)	金 アメリカ 銀 カナダ 銅 日本(山村・円角)	金 アメリカ 銀 カナダ 銅 日本	
第2回 1991	サレルノ(イタリア)	金 日本(浪花美保) 銀 イギリス 銅 カナダ	金 日本(浪花・美保) 銀 ソ連 銅 アメリカ	金 日本 銀 アメリカ 銅 カナダ	
第3回 1993	リーズ(イギリス)	金 ロシア(オシガ・ブルスニキ) 銀 カナダ 銅 日本(武田美保)	金 ロシア 銀 カナダ 銅 日本(武田・宮崎)	金 日本 銀 日本 銅 ロシア	
第4回 1995	ボン(ドイツ)	金 ロシア(ネルガ・ブルスニキ) 銀 フランス(ビルクニ・ドボウ) 銅 カナダ (4位)日本(中島理保)	金 ロシア 銀 日本(藤田・中島) 銅 アメリカ	金 日本 銀 日本 銅 ロシア	
第5回 1997	モスクワ(ロシア)	金 ロシア 銀 韓国 銅 カナダ (4位)日本(江上綾乃)	金 韓国 銀 ロシア 銅 日本(江上・菊沢)	金 ロシア 銀 日本 銅 アメリカ	
第6回 1999	カリ(コロンビア)	金 ロシア(カトリコ・アナスタシヤ) 銀 フランス 銅 イタリア (注)アメリカ、カナダ、日本は不出場	金 ロシア(アナスタシヤ組) 銀 韓国 銅 イタリア	金 ロシア 銀 韓国 銅 イタリア	
第7回 2001	シアトル(アメリカ)	金 ロシア(カトリコ組・アナスタシヤ) 銀 カナダ 銅 日本(加藤友美)	金 ロシア(アナスタシヤ組) 銀 日本(加藤・橋) 銅 スペイン	金 ロシア 銀 日本 銅 中国	
第8回 2002	モントリオール(カナダ)	金 ロシア(オスター・シヤイバチエフ) 銀 カナダ 銅 スペイン (5位)日本(小林寛美)	金 ロシア 銀 カナダ 銅 アメリカ (5位)日本(小林・飯塚)	金 ロシア 銀 日本 銅 カナダ 銅 スペイン	
第9回 2004	モスクワ(ロシア)	金 ロシア(オスター・シヤイバチエフ) 銀 アメリカ 銅 カナダ (4位)日本(小西貴子)	金 ロシア 銀 アメリカ 銅 日本(小西・市川)	金 ロシア 銀 日本 銅 中国 銅 中国	

方で、フィギュアを実施するジュニアの大会においては、フィギュア結果によって個々の力を見ることができ、またそれによって決勝ではチームメンバーやデュエットメンバーの入れ替えを行う国が続出する。その結果、予選とは違ったチームパフォーマンスが見られ、またフィギュア結果によって決勝で大きく順位変動することがある。つまり、順位の入れ替わりが激しく、最終結果が出るまで最終順位が予想できないという非常にスリリングな大会である。

また、5日間の長丁場を乗り切る精神力と体力が要求されるため、選手・コーチにとって大変ハードな大会である。

### 3. 本大会の概要

第9回大会は、ロシア、モスクワにあるモスクワオリンピックプール(写真1)で開催された。30カ国の参加があり、エントリー数

はそれぞれソロ30組、デュエット24組、チーム20組、FRC18組であった。フィギュアには220名の選手が出場し、競技を終了するまで約6時間かかった。

日本から参加したジュニアナショナルチーム選手団は、選手10名(写真2)、コーチ3名(鶴飼美保、本川美帆、石山加壽美)、審判員2名(樋口恵好、本間三和子)の計15名であった。

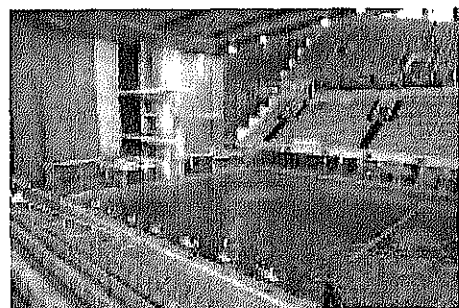


写真1 競技会場のモスクワオリンピックプール(ダイビングプール)



写真2 日本代表ジュニアチーム

今大会にはアジアから日本の他に、中国、カザフスタン、タイ、マレーシア、マカオ、ウズベキスタンの7カ国が出場し、アジア大陸からの過去最多出場国数を記録した。北朝鮮および韓国はエントリーしていたものの直前に参加を取り止め、非常に残念であった。今後アジア諸国のシンクロの普及・発展がますます活性化するようお願いしたい。

#### 4. 予想と競技結果

日本チームの競技結果は表2に示した通りである。ソロ（小西貴子）は第4位、デュエット（小西貴子・市川智紗）は第3位、チーム（小西貴子・市川智紗・木村紗野・木村真野・小林祐加子・小林千紗・木下舞・江本可奈・山本麻以・藤瀬咲季）は第2位、FRC（チームメンバーと同じ）は第2位であった。大会前の国内での予想は非常に厳しく、強化委員からは日本のフィギュアの弱さを指摘され、どの種目もメダル獲得が難しいのではないかとされていた。しかしながら、前回の第8回大会でソロ、デュエットともにメダルを落としたことと比較すると、今回はソロ以外はメダルを獲得できたという意味で日本チームは善戦したといえよう。

#### 5. 日本チームおよび他国の戦いぶり

日本は、ルーティンでは日本の良さ、持ち味を存分にアピールでき善戦したと思う。特

表2 第9回ジュニアシンクロナイズドスイミング選手権（モスクワ、2004）競技結果

##### ソロ

最終順位	国	フィギュア 5.0%	フリー決勝 5.0%	最終得点
1	RUS	41.352	48.550	89.902
2	USA	38.846	47.500	86.346
3	CAN	38.699	45.900	84.599
4	JPN	37.460	47.060	84.510
5	ITA	37.741	46.250	83.991
6	GRE	38.059	45.750	83.809

##### デュエット

最終順位	国	フィギュア 5.0%	フリー決勝 5.0%	最終得点
1	RUS	40.381	48.050	88.431
2	USA	38.536	46.550	85.086
3	JPN	37.398	47.060	84.486
4	GRE	38.398	45.450	83.848
5	CHN	37.605	46.200	83.805
6	ITA	37.302	45.800	83.102

##### チーム

最終順位	国	フィギュア 5.0%	フリー決勝 5.0%	最終得点
1	RUS	39.446	48.150	87.596
2	JPN	37.510	47.250	84.760
3	CHN	37.830	46.650	84.480
4	USA	36.748	47.050	83.798
5	ITA	37.360	46.350	83.710
6	CAN	37.272	45.900	83.172

##### フリールーティンコンビネーション

最終順位	国	最終得点
1	RUS	96.600
2	JPN	94.900
3	CHN	94.000
4	ITA	92.600
5	CAN	91.900
6	GRE	91.300

に選曲と展開の速い構成がよかったようである。また最後までパワーが落ちることなく高いある演技を見せ、本番での強さを感じさせた。フィギュアでは、ロシア以外はどの国も苦戦していた。ロシアはルーティンもフィギュアも手堅く得点し今大会では全種目優勝しロシアの強さを痛切に感じさせられた。しかし、チームとFRCの2種目において、日本が2位、中国が3位に入賞した。表彰台の真ん中をロシアに譲りはしたが、表彰台の両側をアジアが占めたことは大変喜ばしいことであった。以下に種目ごとの戦評を述べる。

## 5-1 ソロ

日本代表の小西貴子選手（井村シンクロクラブ）は会心の演技を見せた。構成面ではフィギュアの難度と多様性、究極の高さが不足していたこと以外は、上半身の動きも大きくなめらかで音楽ともよく調和していた。ルーティン得点は予選・決勝とも3位であったが、フィギュア得点でカナダに抜かれ最終結果は4位となった。

優勝したロシアのイチチェンコ選手の演技（写真3）はジュニアの域を超え、難度の高さ、完速度の高さ、音の強弱のつかみ、瞬発力などのほぼすべての面において「Near Perfect」だった。彼女だけは他の選手とステージが違った。2位のアメリカは難度、完成度が高く、丁寧な泳ぎで、旨味を感じさせた。3位のカナダはルーティンこそ予選・決勝ともに5位であったが、フィギュアで高得点をマークし最終得点で小西選手をかわした。アメリカ、カナダにはソリストの魅力はなかったが、ヨーロッパ勢（スペイン、ギリシャ、イタリア）は魅力的なソリストが揃っていた。

## 5-2 デュエット

日本代表の小西貴子・市川智紗組（どちらも井村シンクロクラブ）は予選で最高の同調性を見せ、一体感あふれる演技でロシアについて2位で予選通過した。脚技の難度に不足が感じられたが、音と動きの一体感や曲の取り方は他の国には見られない多様性と躍動感があった。最終的にはアメリカのフィギュア



写真3 ソロ優勝のイチチェンコ選手の最初の  
大技（ロケットサイドスプリット）



写真4 優勝したロシアのデュエット

得点に及ばず3位となった。優勝したロシアのデュエット（写真4）は最年少の1989年生まれであったこと、「白鳥の湖」のルーティンを泳いだことに驚かされた。「白鳥の湖」は2002年のワールドカップ優勝者のロシアのダビドワ・アナタスシア、エルマコワ・アナタスシア組が泳いだ演目で、その展開の速さと難度の高さは圧巻だった。その振り付けこそ若干ジュニア風にアレンジされていたようだが、シニア選手の最高峰の演目を最後まで泳ぎきるレベルの高さは見事だった。今後の成長が楽しみである。

## 5-3 チーム

複数の審判員から日本チーム（写真5）の速い動きのすばらしさをほめられたが、ある審判員からはプールカバレッジ（プール利用率）の小さいことと演技前半の難度の低さを指摘された。その指摘に賛同すると同時に、今回のチームの完成度は最後まで課題が残った。特に決勝は、フィギュア得点の結果により予選で泳いだ選手と補欠選手を入れ替えたために最後までごこちなささが感じられた。選手の交代は苦しい選択ではあったが結果的には正しい判断であった。今回フィギュアで苦戦していたのはアメリカであろう。予選・決勝のルーティンで3位につけていたが、やはりフィギュア得点で1点以上も差をつけら



写真5 日本のフリールーティン演技

れていた中国には及ばず4位に終わった。

#### 5-4 フリールーティンコンビネーション

日本の構成の面白さは光っていた。ソロ、デュエットそれぞれの持ち味が上手く生かされ、特に素早い動きで泳ぎきったパートは観衆の目を惹き付けた。決勝の出来は最高で、切れのある動きでエネルギーにあふれたとても良い演技だった。優勝したロシアの演技構成は目を楽しませ、演出の上手さが際立っていた。イタリアのダイナミックで迫力のあるルーティン、そして盛り上げ方のうまさもすばらしかった。

### 6. 日本チームの課題と持ち味

#### 6-1 技術的・体力的課題

本大会を振り返って、日本チーム（選手）の技術的・体力的課題および具体的目標（→で示す）は次のようにまとめることができよう。

- ① 脚のライン（膝、つま先）の改善 →質の高い強い脚と脚線美が求められる
- ② フィギュアの高さ獲得 →両脚での垂直姿勢の場合、太腿半分以上の水上高（水上高とは水上に出た身体の高さをいう）が求められる
- ③ ルーティン中のフィギュア（脚技）の高

さ獲得 →片脚時は水着まで、両脚時は太腿半分以上の水上高。素早い動きも高さが低いのもっと高い位置での早い動きが求められる

- ④ ルーティン中のエッグビーター（巻き足での立泳ぎのこと）の高さ獲得 →脇の下までの身体水上高が求められる
- ⑤ 基本運動能力の向上

基本運動能力に関しては、競技会後のコーチセミナーでロシアの選手（エージグループ13～15の選手）によるジムトレーニングが紹介された。そこに登場した選手らは懸垂10回、脇を締めた腕立て伏せ10回、肋木にぶら下がって下肢を水平まで挙上する腹筋30秒間以上を軽くこなしていた。競技会時にもイタリア選手の身体つきは非常に鍛えていることが一目瞭然でエッグビーター（巻き足での立泳ぎのこと）も高く、動きがパワフルだった。フランス選手の身体もかなりトレーニングを積んでいる感じがした。日本選手の身体つきと運動能力についてはまだまだ改善の余地があると感じた。

#### 6-2 戦略的課題

戦略的課題としては次の2点があげられよう。

- ① ソリストの育成
- ② 競技会前の情報収集 →特にフィギュアの傾向についてのヨーロッパからの情報収集。

ソリストは生まれ持った先天的な素質によるところが大きいですが、タレントのある選手を発掘し、リズム感や表現力を身につけさせ、演じることのできる選手の育成が急務である。

#### 6-3 日本の持ち味

日本チームの持ち味として、構成の良さ、特に、多様性、音楽の取り方、音と動きの調和、パターンチェンジの面白さ、展開の速さ、動きの速さ、躍動感などがあげられる。今後

はこれらの良さをさらにアピールし、日本しかできない演技を開発していきたいと思う。

## 7. おわりに

以上、ジュニアシンクロナイズドスイミング世界選手権を通し、改めて他国のレベルアップを感じ、日本の今後の厳しさを痛感した。とりわけ脚線の美しいヨーロッパ勢が、今後テクニックの上手さを身につけてくれば、日本のメダル獲得はますます厳しくなる。小型の日本チームがそれらを一步先んじるには、さらなるスピードの改善と水上の身体高の向上を目指さなければならない。同時に、表現力豊かなソリストの育成と脚質の改善は必須の課題といえる。

### 注記

- 注1) ソロ：泳者1名で演技する。
- 注2) デュエット：泳者2名で演技する。
- 注3) チーム：泳者4～8名で演技する。世

界選手権、オリンピック等では8名と規定されている。

- 注4) フリールーティンコンビネーション：泳者4～10名で演技する。5分間に、ソロ、デュエット、チームのフリールーティンを交互に組み合わせる。チームパートは2分以上含まなければならない。
- 注5) フリールーティン：約3～4分の制限時間が設けられ、伴奏音楽を用いて自由な構成で演技を行うものである。
- 注6) フィギュア：競技プログラムのひとつで、基本姿勢と基本動作を組み合わせた一連の動作の出来を競う。審判団の前に一人ひとり出て、試技を行い、採点される。
- 注7) テクニカルルーティン：約2～3分の制限時間が設けられ、伴奏音楽を使用し、演技中にルールで定められた6～9個の規定要素を順序通りに実施することが求められる。